



# 清元志寿雄太夫

## 清元志寿造

「たつぷり名曲」のシリーズに、今回は清元節の登場です。

どなたもご存じの、隅から隅まで聴きどころの詰まった名曲としては、「かさね」などもありますが、構えの大きさとい、格調といい、演奏時間の長さも含めて、清元の大曲をたつぷり味わえるのは、やはりこちらだろうということ、今様須磨の写絵」を選ぶことにいたしました。上の巻と下の巻を通しての演奏は、なかなか貴重な機会となります。

### 今様とは

「今様」というのは、直接には当世風という意味ですが、歌舞伎舞踊における「今様」とは何を当世風にするかという、これは能を当世風に「くずす」、もしくは「やつす」ことを意味しました。したがって、「今様須磨の写絵」は、須磨を舞台と



清元志寿雄太夫

する能『松風』を、歌舞伎舞踊に移したもののということになります。

熊野松風は米の飯、と俗にいわれるほど、広く知られた名作である能『松風』は、勅勘を受けて須磨に流された在原行平に、土地の海女の姉妹である松風と村雨が恋をする物語です。『汐汲』という古作の能をもとに改作して、観阿弥が作曲し、世阿弥が改修を加えたものと推測されています。

### 貴種流離

中央から流された貴種が、天ざる鄙の地で無垢な乙女と恋をするというパターンは、王朝貴族の『源氏物語』から、はたまたイタリヤ系マフィアの「ゴッド・ファーザー」にいたるまで、洋の東西を問わずわひとつの王道ではあります。そこに三角関係を持ち込んで、しかもその恋を争うのが美しい姉妹という欲張った物語で、汐汲む桶に映る月の姿を「月は一つ、影は二つ」と、行平という月を慕う二人の姉妹になぞらえています。

『須磨の写絵』は、この有名な『松風』を

清元に移し、松風・村雨姉妹の相手として、上の巻には行平、下の巻には松風に横恋慕する船頭此兵衛を配しています。

### 格調と変化の妙

舞台となる須磨の浦は、光源氏が都から流されたことでも知られる地であり、また須磨・明石と並称される月の名所としても知られます。夕暮れ時に始まる物語は、やがて名高い月が美しく澄みわたる中で、鄙びた情趣の典型とされる汐汲みのわざを見せたのち、月光の下で展開してゆくこととなります。

汐汲む海女のクドキ、三年にわたって都を離れている行平の述懐、その行平と縁を結んだ美しい姉妹のクドキ、そして波立つ嫉妬。その嫉妬をやわらげて、三人が揃っての手踊りが、上の巻のクライマックスです。

帰洛を許された行平が、姉妹に心を残しながら立ち去ったあと、下の巻では、その跡を慕ってゆこうとする姉妹の前に、此兵衛が立ちほだかります。行平の形見の装束を身につけた松風の狂乱という、



清元志寿造

能以来の狂乱物としての魅力。それを無理に口説く此兵衛のおかしみ。しかし、それでも行平をあきらめない松風に、とうとう「可愛さあまって、憎さが百倍」と、刀を抜いて切りつける此兵衛と、松風の立ち回りとなります。

大曲に相応しい格調と、変化に富んだ構成の妙を、お楽しみください。

文／児玉竜一

### 児玉竜一さんによる 第一部の演目解説も大人気

たつぷり名曲シリーズでは、演奏に先立ち名曲の名曲たる由縁やその聴きどころなどを児玉竜一氏の解説でお楽しみいただけます。こちらも隠れた人気となっております。

#### これまでのアンケートより抜粋

- 児玉竜一さんの解説が大変よかったです。そのおかげで前知識がほとんど無くても楽しんでみられました。
- 本日の児玉先生のお話とても良い勉強になりました。良く知っていたつもりの方が更に面白く聴けました。
- 解説も相変わらずというか、面白く要領よく理解が進むお話ぶりに更に磨きがかかって、楽しい導入部でした。

## 紀尾井たつぷり名曲5 清元 須磨の写絵 清元志寿雄太夫 × 清元志寿造

【出演者】

淨瑠璃：清元志寿雄太夫、清元清美太夫、清元一太夫、清元飄太夫

三味線：清元志寿造、清元美三郎

上調子：清元美十郎

囃子：望月太津之連中

解説：児玉竜一

【曲目】須磨の写絵

9/10  
14:00